

小室は旧制白石中時代の同級生らと終走むらぬ友情で結ばれていた(二列目右端が小室、三列目右から三人目が佐藤忠太郎)



政宗騎馬像余話

小室達日記から



仙台城跡にある伊達政宗騎馬像がどとうた致射な連命を語るには、やはり順を追って記さねばなるまい。話は昭和とヒトケタの時代までさかのぼる。

一昨年の藩祖政宗三百五十年祭はまは記憶に新しいが、その五十年前の昭和十年は、政宗が世を去ってから三百年たった三百年祭に当たっていた。

この記念すべき年に、奥連合青年団は広く寄付金を募って、政宗公の甲冑(かっちゅう)騎馬像の銅像を建立することを決めた。昭和八年のことである。

計画が明らかになるも、大変な苦難を巻き起こした。同年五月の河北新報投書欄に次のような投稿があった。

「未だに作者の決定を見ない事に私は無関心でははいれない。何となれば一つの作品を成すまでにはう作家の努力、これを充分らしめなれば、作品に傑作を現すことは出来ぬ。之を要するから(中略)作者の選定だが郷士の生人(なまびと)作家を以てすることを第一案と考えよう。相当な筆冨者がわが仙台藩内に現存していないのなら知らず、現在地方の過往者を看過して、人選するというような(マ)はやってもらいたくない(白石 佐藤忠太郎)

佐藤は、柴田町(当時松根町)入間出身の帝國美術

彫刻にささげた人

彫委員小室の旧制白石中時代の同級生で親友、地元出身の彫刻家の中から早く作者を選べよと正論を述べながら、側面から小室を推していたのであろう。小室は親友の努力に感謝し手紙を送っていた。

「君達の御同情と御奔走によりたんだん製作に決定される模様になってきたので、私も私に決定したと気が持ちとなり、世界的傑作人

▷②

作者決めた友情

作の心配が大きいと思われまじし決定した今年(昭和)の帝展と来年の帝展から今年(昭和)にも届い(ひ)であらう。同年六月、小室は志願を休む一心で、東京に住む小室に代わって、奥内(おくうち)で各方面に働き掛け、進力を注ぎ、あらゆるものを犠牲として、万難を排して、

山公(やまこう)政宗の心になって精進します。」

このすさまじいまでの意気込みが青年団にも届い(ひ)であらう。同年六月、小室は志願を休む一心で、東京に住む小室に代わって、奥内(おくうち)で各方面に働き掛け、進力を注ぎ、あらゆるものを犠牲として、万難を排して、

この後、小室の苦闘が始まるのだが、それは順次紹介するとして、ここでは小室在藤の友情を示すような、不思議なエピソードに触れておこう。

小室の業績を調べ続け、柴田町親大(ちかた)小校長後藤藤三(ふじ)は、奥教委が昨年三月発行した小学校進徳郷土資料「どうとく」を開いた時の書きを今も楽しそうに語る。

「小室さんと佐藤さんが一緒に紹介されているんです。全くの偶然。びっくりしました。」

小室が「一生を彫刻にささげた人」として、佐藤は「和紙の美しさをひかかれ、和紙工芸を創始した人」として、ともに決意の心を打っている。友情は二人の死後も続いている(と)言わねばかりの話ではないか。

この友情をはぐくんだ旧制中学時代の小室の生き方は、今の教育ママが聞いたら倒せんばかりの破天荒なものだった。

(敬称略)

奥下の青年団諸君の清い純な